流星群に願いを

登場人物　主人公　多田聡太（ただ　そうた）
おじさん　都築拓郎（つづき　たくろう）
聡太　父
アナウンサー
看護師
医者

○某テレビ局内　スタジオ　最年少宇宙飛行士　多田聡太(24)にその経緯をインタビューするコーナー
女子アナと多田聡太が椅子に座っている。

女子アナ「それでは本日のゲスト！宇宙飛行士の多田聡太さんです！！」
聡太「こんにちは！」

聡太、座ったまま軽くお辞儀をする。

女子アナ「多田さん！今回、最年少の宇宙飛行士ばかりか日本人初の月面調査員として
選ばれたことについて感想いかがですか？？」

多田「いやぁ、、子供の頃からの夢だったので本当にうれしいです！！」

女子アナ「〝子供の頃からの夢〟と仰いましたが宇宙飛行士になりたい！と思われたきっ
かけ
みたいなことってありますか？」

聡太「きっかけ……ん～」

聡太、少し上を見上げ

聡太「……少し……長くなっちゃうんですがいいですか？？？」

女子アナ、ニコニコしながら

女子アナ「もちろんです！！今回は多田さんのコーナーなのでいくらでも！！」

聡太、記憶を辿るようにゆっくりと喋り出す

聡太「僕が小学生のころ、めちゃくちゃ田舎だったんですけど町の隅っこにでっかい屋
敷が
あって、、僕らそれを〝ばけやし〟って呼んでて、、あ、これお化け屋敷から
来てるんですけど！」

聡太、少し笑いながら

聡太「それでね！そこの窓から見えてたデカい望遠鏡があって！
ちょうどこのくらい！」

聡太、立ち上がって自分の身長の少し下に手を当てて高さを説明した

女子アナ「大きいですね！！」

聡太「そう！僕ずーっとそれが気になってて！！行ったんですよ！夏休みに！ひとりで！」

聡太、腰を下ろす

女子アナ「へぇー！怖くなかったですか？？？」

聡太「いやぁ、怖かったですよ！！でも好奇心の方が勝ってたんですかね、、
気づいたらインターホン押してて……そしたら怖い顔したおじさんが
出てきて！おじさんって言ってももう70過ぎのおじいちゃんなんですけど」

聡太、笑いながら

聡太「望遠鏡見たい！って言ったら"次の満月にこい"って言うんで行ったんです！」

○回想　長野にある田舎町　夜の7時頃。町の隅っこにある洋風な屋敷「ばけやし」。

小学生時代の聡太、インターホンを押す。

ピンポーンとなるが誰も出ない。

聡太、2回目を鳴らし

聡太「おじさーーーん！」

聡太、もう一度鳴らしさらに大きい声で

聡太「おじさぁーーーーーん！！……

あれぇ？？」

聡太、もう一度インターホンを鳴らし、すぅーっと息を吸いさらに大きな声で

聡太「おぉ！じぃぃ！」

ガチャッと扉が開く。出てきたのは都築拓郎（72）

都築「うるさい！！聞こえとるわ！！」

聡太、呆れた様子で

聡太「なんだぁ、いるなら早くしてよぉ、、」

都築「何度も叫ぶな！近所迷惑だろ！！」

聡太「近所って……お隣さんあれだよ？？？」

聡太、畑の向こうにある家を指差す

都築、ため息をついて

都築「……で、なんのようだ」

聡太「や・く・そ・く」

都築「約束？？」

聡太「えぇー、忘れたのぉ、、今日満月だよ？？あれ見せてくれるって約束したじゃーん」

聡太、呆れた様子で月を指さした。

都築「あぁ……あの時の……はぁ、、入れ」

都築、めんどくさそうに体を逸らし聡太が通れるようにする

聡太「やったぁ！！」

聡太、躊躇せず喜びながら中へ走って入り靴を急いで脱いで上がる

都築宅、二階建ての豪邸。一階のリビングは散らかっていてテーブルの上と棚に本が大量に置いてある。

聡太「なにここぉ……図書室みたーい」

聡太、テーブルの上の本の表紙を人差し指で持ち上げて中を覗こうとする

都築「おい！！余計なとこさわるんじゃない！2階の奥の部屋だ！
先に行って待っとれ！」

都築、階段を指差す

聡太、パタンと指を離し本を閉じて都築の方を振り返る

聡太「は、はーい！」

聡太、小走りで階段を登る。少し登った時、リビングの方から「走るな！」と声が聞こえた。

聡太、呆れた様子で「はぁ」っとため息をついてゆっくりと階段を登り出す
薄暗い廊下を歩きながら

聡太「もぅ……いちいち怒鳴らなくてもわかるって……」

聡太、ぶつぶつと小さい声で文句を言いながら奥の部屋へ向かう
扉の開いた部屋へ辿り着き中を覗くと相変わらず部屋は本で散らかっていた。
大きな出窓があり、外に向けられた聡太よりも大きな天体望遠鏡を見つける

聡太「あぁー！！あったぁ！！」

聡太、望遠鏡に駆け寄り指でちょんちょんとつつく

聡太「やっぱ近くでみると大きいなぁ！……どうやって使うんだぁ？？あれぇ
覗くとこないじゃん」

聡太、望遠鏡の隅々を調べるように見た

都築「横から覗くんだ」

聡太、驚いて後ろを振り返る

聡太「わ！びっくしりたぁ……」

都築、望遠鏡に近づきカチャカチャとファインダー（本体の斜め上についている照準を合わせる
ための低倍率のスコープ）の蓋を取り、そこを覗きながら横の二つのハンドルをくるくるると回し
ながら標準を合わせている

聡太、その様子を静かに後ろから眺めている

都築、近くにあった椅子を天体望遠鏡の横に置いて

都築「見てみろ」

聡太、椅子によじ登り望遠鏡の接眼鏡をゆっくりと覗く

そこには銀色に輝く月のクレーターや山々がはっきりと見えていた

聡太「うわぁ！すげぇー……おじさん、、僕こんなすごいの初めて見たよ、、」

都築「満足か？？」

聡太「うん！ありがとう！！……もう少し見ててもいい？？」

都築「好きにしろ……」

聡太、都築の言葉が遅れてやって来たかのように「……うん」と答えた

都築、部屋の扉を閉めずに廊下に出て1階のリビングへ向かう。

コーヒーメーカーの蓋を開けコーヒー豆を入れる。

都築の顔はどこか嬉しそうにしていた。

コーヒーが出来上がりマグカップにコーヒーを注いでいると2階から

聡太「おじさーん！ねぇーおじさーん？」

都築、コーヒーを持ちながら2階に向かう

都築「どうした？」

聡太、望遠鏡を覗きながら

聡太「なんかズレてって見えなくなっちゃったよ？これネジ緩んでちょっとづつさがってるかも」

都築「そうじゃない。月が動いてるんだ」

聡太「そうなの？！」

聡太、覗くのをやめて都築の方を見た

都築「月も地球も太陽も星はみんな動いてるんだ」

都築、再びファインダーを覗き照準を合わせる

都築「ほら……出来たぞ」

聡太、再び覗きながら

聡太「……へぇ……すげぇ、あんなデカいのが動いてるのか……」

都築、椅子に座りその様子をコーヒーを飲みながら見ている

聡太、覗きながら話し始める

聡太「ねぇおじさん？」

都築「……なんだ」

聡太「あそこって行けるの？？」

都築「行ったやつはいるが簡単には行けんな」

聡太「……行けるのかぁ……」

都築「行ってみたいか？？」

聡太「うん」

都築「空気も水もない。岩や山や砂漠だけの死の世界だぞ？」

聡太「死の世界？？」

都築「そうだ……重力は6分の1、昼間は110℃夜は-170℃

宇宙服がなけりゃ1秒ももたん」

聡太「おじさん行ったことあるの？！」

都築「いや……行ったことはないが行きたかった」

聡太「行かないの？？」

聡太、望遠鏡を覗くのをやめて立っていた椅子の上に座り都築を見て話し始めた

都築「……こんなおいぼれが行けるようなとこじゃない」

聡太「ふーん……」

都築「時間だ。子供がこんな時間まで遊んでちゃいかんだろ」

都築、壁にかかってる時計を見ながら言った

聡太「はぁーい」

聡太、ヒョイと椅子から降りるとペタペタと音を立てながら歩いて行った

都築宅、玄関　聡太が靴を履いている時

都築「ぼうず、家は近いのか？」

聡太「ぼうずじゃないよ聡太だよ」

都築「一人で帰れるのか？」

聡太「帰れるよ。近くだもん！あっちの方！」

聡太、適当に指を刺した

都築「そうか」

聡太、靴を履き終えて都築の方を見て

聡太「おじさん、また来ていーい？？」

都築「……好きにしろ」

聡太「やったぁ！ありがとう！おじさんまたねぇ」

聡太、ご機嫌そうに家を飛び出して走っていた。

都築、玄関を閉める。

○別の日の夜　都築宅　玄関前

聡太「おじさーん！おじさぁ」

ガチャっと扉が開き都築が出て来て

都築「うるさい！」

聡太、家に入っていく

ドタドタ走る音と「走るな！」という都築の怒鳴り声が聞こえる

○別の日の夜　都築宅　玄関前

聡太「おじさぁーん」

ガチャっと扉が開き都築が出てくる

都築「ぼうず、インターホンを忘れたのか？」

聡太「聡太だよぉ……」

都築「ふん……さっさと入れ」

聡太、ゆっくりと入っていき扉が閉まる

○別の日の夜　都築宅　玄関前

聡太、インターホンを押す。

ガチャッと扉が開き都築が顔を出す

都築「遅い！！急げ！」

聡太「だってパパがトイレ長いんだもーん」

都築「いいから急いで上がらんか！」

聡太「いつもは〝走るな！〟って言うくせにぃ」

バタン！と玄関を閉める都築

○同日　望遠鏡のある部屋　望遠鏡を覗く聡太とそれをコーヒーを飲みながら見ている都築

聡太、望遠鏡を覗きながら

聡太「おじさん？？」

都築「なんだ？」

聡太「このさぁ、土星の輪っかって乗れるの？？？」

都築「土星の輪は小さな石ころの集まりだ。乗れはしない」

聡太「ふーん……」

聡太、ファインダーを覗き慣れた手つきでハンドルを回して「よし」といって望遠鏡を覗く

聡太「おじさん？？」

都築「なんだ？」

聡太「人ってさぁ、星になれたりするの？？」

都築「どうしてそんなこと聞く」

聡太「……パパがね、、ママは星になったんだって言ってた。
でもこれ見てるとそうじゃないかもって思ってて」

都築「なぜそうじゃないと思うんだ？」

聡太「だって土星も金星も月もみんな人っぽくないもん
けんちゃんも〝そんなわけない！〟って言ってたしぃ」

都築「……けんちゃんは宇宙へ行ったことがあるのか？」

聡太、覗くのをやめて椅子の上に立ったまま都築を見た

聡太「わかんないけどぉ、、行ってないと思うよ？」

都築「じゃあなぜ人が星になれないと断言できる
人類はまだ宇宙の数％も理解できておらん
人が星になれるかどうかなんてわからん」

聡太「そうだよね！じゃあ宇宙に行けばお母さんに会える？！」

都築「……それもわからん……」

聡太「なんだぁ……じゃあどうしたらいいのぉ？」

都築「そりゃあ……行ってみりゃわかる」

聡太「そっか！」

聡太、椅子をヒョイと降りて

聡太「そろそろ帰るね！土星も凄かったぁ！」

聡太、都築、部屋を出て玄関へ向かいながら話す

都築「土星がここから見えるのは稀でな。
今日は天気もいいし条件も良かった
おまえさんが遅刻しなけりゃもっとゆっくり見れたんだがな」

○同日　都築宅　玄関　聡太が靴を履き終えて

聡太「おじさん。次はいつ？？」

都築「次の日曜日だな……晴れてたらこい」

聡太「はーい！」

聡太、玄関を開けて帰っていく

○日曜日　夜7時頃　雨が降っている。

都築、窓を見つめながらコーヒーを飲んでいるとインターホンがなる

都築、腰を上げて玄関に向かい扉を開けながら

都築「おいおい、来るのは晴れてたらって言ったはず……」

外に立っていたのは手に紙袋をもった30後半の男性だった

男性「こんばんは、、突然すみません……」

都築「……あなたは？？」

男性「聡太の父です。いつも聡太がお世話になってます」

都築「あぁ……そうでしたか、いえいえ

どうぞ。お入りになってください……」

聡太父「すみません。お邪魔します……」

都築、聡太父がリビングに上がる

都築「どうぞ！散らかってますが」

都築、椅子を引きコーヒーメーカーの方へ向かう

父「すみません……あのこれ！つまらない物ですけど」

父、持って来ていた菓子折りを渡した

都築、コーヒーを淹れながら

都築「お気遣いどうも……」

父「すみません。ご挨拶が遅くなってしまって……」

都築「挨拶なんてそんな、大したことはしておりません」

父「今日はお願いがあってきました……」

都築「お願い？……とは」

父「散々お世話になっといて申し訳ないのですが……

これからも時折り聡太に星を見せてやってはくれませんか？」

都築「……」

父「もちろんお代はお支払いします！」

都築「お代なんてそんなもんいりません」

父「聡太のやつ、妻が亡くなって3年経つんですが

今だに元気がなく友達もできなくて……でも！

あなたに星を見せてもらうようになってからすごく明るくて

楽しそうに星の話をするんです！」

都築「そうでしたかぁ……私はかまいませんよ？

もともとそのつもりでした。」

父「本当ですか？！ありがとうございます！！」

都築「聡太くんは純粋で好奇心旺盛でいい子です。彼のような子には
謎の多い宇宙が向いている。それに私も元気をもらっとるんですよ」
父「……ありがとうございます」
都築「あぁ……そうだ、お父さん。ちょうど良かった」

都築、飲んでいたコーヒーを置きカレンダーを見る
カレンダーの8/20のところに丸い印が書いてある

父「なんでしょう？？」
都築「今月の２０日なんですが聡太くんをお連れしてもよろしいかな？」
父「もちろん大丈夫ですが……何かあるんですか？」
都築「ペルセウス座流星群ですよ。遅い時間になるのでこちらからお父さんに
連絡入れねばと思ってたんです。見せてやりたい」
父「それはありがたい！是非よろしくお願いします！！」

父、座ったまま深々と頭を下げた

都築「聡太くんに伝えといて下さい」
父「わかりました！聡太きっと大喜びですよ！」

都築、少し笑った

父「それでは私はこの辺で……本当にありがとうございます！」
都築「いえいえ……それでは」

父、玄関を開けて閉める前に嬉しそうに都築に頭を下げて扉を閉めた

都築、リビングからそれを見送り椅子に座る

○８月２０日　夕方頃　聡太自宅のリビング

聡太はリビングの椅子に後ろ向きで膝立ちになり

カレンダーの８/２０の星印を眺めながら鼻歌を歌っている

父、玄関を勢いよく開けリビングに走ってきて膝に手を当てて息を切らしている

聡太「走るな！！っておじさんに怒られるよぉ～」

聡太、イタズラっぽく言う

父「聡太……はぁはぁ……都築さんが……おじさんが」

聡太「おじさん？？どうしたの？？」

○町にある唯一の病院　廊下を走って病室に駆け込む聡太と父。

ベッドには人工呼吸をつけて寝ている都築。

ベッドに駆け寄る聡太。父はゆっくりと歩き聡太の後ろに立っている

聡太「おじさん！！……大丈夫？？」

都築、少し目を開けて

都築「……大きな声を出すなと……いつも言ってる……だろ」

聡太「……おじさん……どうしたの？？」

都築「……さぁな……少し胸が痛くなってな……」

聡太「うん」

都築「今夜の……流星群……行けそうにない……

一人で行けるか？」

聡太「やだ！おじさんが行かないなら僕も行かない！！」

都築「だめだ、一人でもいけ……流星群は一度きりじゃない

この先何度も何度も地球にくる……そのとき一緒にみよう」

聡太「……わかった……」

都築「流星群が見えたら願いを叫べ……」

聡太「願い？」

都築「そうだ……今回の流星群は……デカいらしい……

聡太のでかい声で叫べばきっと叶う……」

聡太「……」

都築「……夢があるんだろ？……宇宙にいくんだろ？

叫べ、聡太。お母さんに届くように……」

聡太「……わかった！」

都築「わかったらさっさと行け……」

聡太「……うん！」

聡太、トボトボと部屋を出る

父、都築に頭を下げ聡太を追いかける

都築、「ふぅ」落ち着いたように目を閉じた

○同日　夜11時頃　都築宅、外の花壇に座る聡太。

落ち込んだ様子で星空を見上げている。

ひとつだけ聡太の見ている夜空に流れ星が流れる

聡太「あ！！」

聡太、流れ星がひとつ流れていくのを見て立ち上がり少し前へ駆けていき空を見上げる

○同時刻　病室　看護師と医師が都築の部屋へ走る

○同時刻　聡太、夜空を眺めている

流れ星が2個、3個と徐々に数を増していく

○同時刻　病室　医師が都築の心臓マッサージをしている

○同時刻　聡太、流星群がピークに達し多くの流れ星を見上げながらキラキラした表情。目は流星群の光で輝いて見える

○同時刻　病室　医師が心臓マッサージを止め、看護師になにかを伝えている

○同時刻　聡太、流星群を見ながらハッとして脳裏に都築の言葉を思い出す

聡太「……願い……」

聡太、すーっとありったけの息を吸い、今までで一番大きな声で叫んだ

聡太「おじさんが元気になりますよーにぃ！！！！！」

聡太、息を切らしながら満足そうに花壇に座り流星群を見上げた

花壇に座る聡太にゆっくりと歩いてくる父。手には携帯電話を握りしめている

○回想終わり　某テレビ局内　インタビュー中　アナウンサーと

宇宙飛行士・多田聡太が椅子に座っている

聡太「僕はあの日から何度も何度も流星群を見ました。

流星群を見てると不思議と母さんや、、、おじさんがそばにいてくれてる気がするんです。

その度に、きっと２人は星になったんだって思えるんです。２人のおかげで僕はここまで頑張れた。だからできるだけ近くで、、２人のそばで、宇宙で！〝ありがとう〟

と伝えたいんです！」

聡太、ニコッと笑う。

end